ポランの広場

宮沢賢治

時、一千九百二十年代、六月三十日夜、
処、イーハトヴ地方、
人物、キュステ　博物局十六等官
　　ファゼロ　ファリーズ小学校生徒
　　山猫博士
　　牧者
　　葡萄園農夫
　　衣裳係
　　オーケストラ指揮者
　　弦楽手
　　鼓器楽手

給仕
其他　曠原紳士、村の娘　多勢、

ベル、
人数の歓声、Hacienda, the society Tango のレコード、オーケストラ演奏、甲虫の翅音、
幕あく。
舞台は、中央よりも少し右手に、赤楊の木二本、電燈やモールで美しく飾られる。
その左に小さな演壇、
右手にオーケストラバンド、指揮者と楽手二名だけ

見える。そのこっち側　右手前列に　白布をかけた
卓子と椅子、給仕が立ち、山猫博士がコップをなめ
ながら腰掛けて見てゐる。
曠原紳士、村の娘たち、牧者、葡萄園農夫等　円舞。
衣裳係は六七着の上着を右手にかけて、後向きに左
手を徘徊して新らしい参加者を待つ。
背景はまっくろな夜の野原と空、空にはしらしらと
銀河が亘ってゐる。
すべてしろつめくさのいちめんに咲いた野原のまん
中の心持、
円舞終る。コンフェットー。歓声。甲虫の羽音が一

さう高くなる。衣裳係暗をすかし見て左手から退場。
みんなせはしくコップをとる、給仕酒を注いでまは
る。山猫博士ばかり残る。
山猫博士（立ち上がりながら）「おいおい、給仕、なぜ
おれには酒を注がんか。」
給仕、（周章てゝ来る）「はいはい、相済みません。座っ
ておいでだったもんですからつい。」
山猫博士、「座っておいでになっても立っておいでに
なっても我輩は我輩ぢやないか。おっと、よろしい。
諸君は乾杯しやうといふんだな。よしよし。ブ、ブ、
ブロージット。」

乾杯。山猫博士首を動かしながら歩き廻る。

ファゼロ続いてキュステ登場。

ファゼロ、「あ、山猫博士も来てゐるよ。」

キュステ「あれかい。山猫博士といふのは何だい。」

ファゼロ、「あの人は山へ行って山猫を釣って来て、ならしてアメリカに売る商売なんだ、こわいさうだよ。」

田園紳士　一、山猫博士と握手する。

「いや、今晩は。先日は失礼いたしました。」

山猫博士、「どうです、カンヤヒャウ問題もいよいよ落着ですな。」

紳士「え丶、どうも大へんに不利なことになりました。」

（紳士云ひながらガラスのコップを二つ取ってファゼロとキュステに渡す。

紳士教師のコップに藁酒をつぐ。）

「あなたには何をあげませう。」

キュステ、「さうだね、葡萄水をおくれ。」

給仕「さうですか、坊ちゃんも。」

ファゼロ「うん。」給仕注ぐ。

（山猫博士、紳士と盃を合せ、酒をなめ横眼で二人を見ながら云ふ）「どうも水を呑むやつらが来ると広場も少ししらぱっくれるね。」

紳士四「えゝ、何せまだ子供ですから、それにそちら

はたぶんカトリックの信者でいらっしゃいますから。」
山猫博士、「あゝ、カトリックですか。私も祖父がきついカトリックでしたがね。どうもいかんね、カトリックは。おい注いでくれ。」
（オーケストラはじまる。）
山猫博士「おいおいそいつでなしにキャッツホヰスカアといふやつをやってもらひたいな。」
楽長「冗談ぢゃない、猫のダンスなんて。」
山〔猫博士〕「やれ、〔〕やれ、やらんか。」
（オーケストラはじまる）
みんなコップをおいて踊る。キュステも入る。山猫

博士、調子はづれの声でオーケストラに合せながら、みんなの間を邪魔するやうに歩きまはる。猫の声の時はねあがる。近くのものにげる。ファゼロ立って口笛を吹く。衣裳係、帰って来る。キュステの脚絆解ける〔。〕誰かが云ふ。

「もしもし脚絆が解けましたよ。」

（キュステ列を離れる。衣裳係が走って行ってそれを巻きながら云ふ。）

「どうも困りますぜ、こんな工合ぢゃ。それでも衣裳の整はないのがあっちゃ、こっちの失態ですしね、え丶、どうもこんなこっちゃ困りますぜ。」

（曲変る。みんな踊りをやめる。コンフェットウをなげるもの、盃をあげるもの。）
牧者（一歩出る）「レディスアン、ゼントルメン、わたくしが一つ唱ひます。ええと、楽長さん。フローゼントリーのふしを一つねがひませんかな。」
指揮者「フローゼントリーなんてそんな古くさいもの知りませんな。」
楽手たち「そんなもの古くさいな。」
牧者「困ったなあ。」
鼓器楽手、「わたしは知ってますがね、どうも鼓器だけぢや仕方ないでせう。」

牧者、「あゝ、沢山です。ではどうか※［＃「金＋支」、344-16］でリヅムだけとって下さいませんか。」
鼓器楽手「リヅムといってたゞかうですよ。」
（鳴らす。みんな笑ふ）
牧者、「あゝそれで結構です。（唱ふ）

けさの六時ころ　ワルトラワラの
峠をわたしが　　越えやうとしたら
朝霧がそのときに　ちゃうど消えかけて
一本の栗の木は　　後光を出してゐた、
わたしはいたゞきの石にこしかけて
朝めしの堅パンを噛ぢりはじめたら

その栗の木がにはかに　ゆすれだして
降りて来たのは　二疋の電気栗鼠
わたしは急いで……　　　　。」
山猫博士「おいおい間違っちゃいかんよ。」
牧者「何だって。」
山猫博士「今朝ワルトラワラの峠に、電気栗鼠の居た筈はない。それはカマイタチの間違ひだらう。も少し精密に観察して貰ひたいね。」
牧者「さうでしたか。」（首をちゞめてみんなの中に入る。）
山猫博士「今度は僕がうたふよ。

つめくさの花の　咲く晩に
ポランの広場の　夏まつり
ポランの広場の　夏のまつり
酒を呑まずに　　水を呑む
そんなやつらが　でかけて来ると
ポランの広場も　朝になる
ポランの広場も　白ぱっくれる。」
（みんな気の毒さうに二人の方を見る）
キュステ「おい、ファゼロ、もう行かう。」
フ〔ア〕ゼロ（泣き出しさうになりなが〔ら〕演壇に
のぼり、唱ふ）

「つめくさの花の　かほる夜は
ポランの広場の　夏まつり
ポランの広場の　夏のまつり
酒くせのわるい　山猫が
黄いろのシャツで出かけてくると
ポランの広場に　雨がふる
ポランの広場に　雨が落ちる」

山猫博士（憤然として）「何だ失敬な。決闘をしろ、決闘を。」

キュステ「馬鹿を言へ。貴さまがさきに悪口を言って置いて、こんな子供に決闘だなんてことがあるもんか。

おれが相手になってやらう。」
山猫博士、「へん、貴さまの出る幕ぢやない。引っ込んでゐろ。こいつが我輩を〔侮〕辱したから我輩はこいつへ決闘を申し込んだのだ。」
キュステ、（ファゼロをうしろにかばふ。）「いゝや、貴さまはおれの悪口を言ったのだ、おれは貴さまに決闘を申し込むのだ。全体きさまはさっきから見てゐると、さもきさま一人の野原のやうに威張り返ってゐる。さあピストルか刀かどっちかを撰べ。」
山猫博士（たじろいで酒を一杯のむ。）「黙れ、きさまは決闘の法式も知らんな。」

キュステ「よし、酒を呑まなけぁ物を言へないやうな、そんな卑怯なやつの相手は子供でたくさんだ。おいファゼロ、しっかりやれ、こんなやつは野原の松毛虫だ。おれが介添をやらう。めちゃくちゃにぶん撲ってしまへ。」

山猫博士、「よし、おい、誰かおれの介添人になれ。」

田園紳士二、「まあまあ、あんな子供のことですからどうか大目に見てやって下さい。今夜はたのしい夏まつりの晩ですから。」

山猫博士（なぐりつける。）「やかましい。そんなことはわかってゐる。黙って居れ。おい、誰かおれの介添

をしろ。おい、ミラアきさまやれ。」
葡萄園農夫「おいらあやだよ。」
山猫博士、「〔臆〕病者、〔お〕い、ケルン、きさまやれ。」
田園紳士三、「おいらぁやだよ。」
山猫博士「おいてめいやれ。」
田園紳士四、「おいらぁやだよ。」
山猫博士、「よし介添人などいらない。さあ仕度しろ。」
キュステ、「きさまも仕度しろ。」（ファゼロに仕度させる）
山猫博士「剣かピストルかどっちかをえらべ。」
キュステ、「どっちでもきさまのいゝ方をとれ。」

山猫博士、「よし、おい給仕、剣を二本持って来い。」
給仕「こんな野原剣がありません。ナイフでいけませんか。」
山猫博士「ナイフでいゝ。」
給仕「承知しました。」（退場　洋食用のナイフを二本持って来て　渡す。）
山猫博士「さあどっちでもいゝ方をとれ。」
ファゼロ、（一本をとり一本を山猫博士に投げて渡す。）
山猫博士、「さあ来い。」
キュステ、「よし、ファゼロ、さあしっかりやれ。」
（闘ふ、ファゼロ山猫博士の胸をつく。山猫博士、周

章してかけまはる。）

「おいおい、やられたよ。誰か沃度ホルムがないか。過酸化水素をもつてゐないか。誰かないか。やられたよ。やられた。」（気絶する）

キユステ、「よくいろいろの薬の名前を知つてやがるな。なあに　傷もつけぁしないよ。」

牧夫「水をかけてやらう。」（如露で顔に水をそゝぐ。）

山猫博士（起きあがる）「あゝ、こゝは地獄かね、おや、ポランの広場へ逆戻りか。いや、こいつはいけない。えゝと、レデース　アンヂエントルメン、諸君の忠告によつて僕は退場します。さよなら。」（すばやく退場、

みんなひどく笑ふ。拍手、コンフェットウ、）

葡萄園農夫（演壇に立つ。）「諸君、黄いろなシャッツを着た山猫釣りの野郎は、正にしっぽをまいて遁げて行った。つめくさの花がともす小さなあかりはいよいよ数を増し　そのかほりは空気いっぱいだ。見たまへ。天の川はおれはよくは知らな〔　〕いが、何でもxといふ字の形になってしらじらとそらにかかってゐる。かぶとむしやびらうどこがねは列になってぶんぶんその下をまはってゐる。愉快な愉快な夏のまつりだ。誰ももう今夜はくらしのことや、誰が誰よりもどうだといふやうな、そんなみっともないことは考へるな。おゝ、

おれたちはこの夜一ばん、東から勇ましいオリオン星座がのぼるまで、このつめくさのあかり照らされ、銀河の微光に洗はれながら、愉快に歌ひあかさうぢやないか。黄いろな藁の酒は尽きやうが、もっときれいなすきとほった露は一ばんそらから降りてくる。おゝ娘たち、（町の人形どものやうに、手数を食った馬鹿げた着物を着ないでも、）お前たちはひときれの白い切をかぶれば、あとは葡萄いろの宵やみや銀河から来る鈍い水銀、さまざまの木の黒い影やらがひとりでにおまへたちを飾るのだ。

あゝ、山猫の云ひぐさではないが、

ポランの広場の夏まつり
ポランの広場の夏まつり　とかうだ。」
（壇を下る　拍子、歓声、オーケストラ、〔数文字空白〕を奏する　円舞はじまる。
幕）

底本：「【新】校本宮澤賢治全集」筑摩書房
　　　１９９５（平成７）年11月25日初版第1刷発行
※宮沢賢治作品の草稿には、繰り返し書き加えられた手直しの跡が残されている。底本の本文は、「原則として作品の最終形態」によっているが、「草稿・原文を校訂して本文を決定した場合には、本文の該当部分を〔　〕で括って」示してある。編者による注記も、〔　〕によって示されている。本ファイルの作成に当たっては、底本が用いた〔　〕をそのまま使用した。
入力：岡本正貴
校正：石川友子

２０００年1月8日公開
２００５年10月18日修正
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。